

プラトン『国家』篇X巻における ミメシス詩拒絶の理由(その1)

— ミメシスの本質に関する議論：ミメシスとエイダス (595B-602B) —

三 上 章

目 次

- I. 問題設定
- II. ミメシスの本質に関する議論
- III. 独特の *εἶδος* 論
- IV. 画家としての哲学者

I. 問題設定

プラトンは、『国家』篇X巻冒頭において、ミメシス詩の拒絶を言明した後、次のように語る。

*λῶβη ἔοικεν εἶναι πάντα τὰ τοιαῦτα
τῆς τῶν ἀκουόντων διανοίας, ὅσοι
μὴ ἔχουσι φάρμακον τὸ εἰδέναι ἀντὰ
οἷα τυγχάνει ὄντα.*

どうやらこういったすべてのものは、聴いている人たちの心を損なうものようだ。その人たちが、それらが本来どのようなものであるかという知識を治療薬としてもっていないかぎり⁽¹⁾はね。

プラトンのこの言葉は、ミメシス詩を拒絶する理由を示しているものと考えられる。「聴いている人たちの心を損なうものようだ」とプラトンが批判する対象は、「こういったすべてのもの」である。すなわち、以上において見たように、プラトンが拒絶したホメロスとそれから生まれた悲劇・喜劇、および

悪しきミメシスを行うハルモニアとリュトモスを伴う抒情詩を指すと解するのが適切であろう⁽²⁾。プラトンは、それらミメシス詩についてその本質を洞察する知識をもっている人たちは別として、その知識をもっていない聴衆の場合は、彼らの心をミメシス詩は損なうものようだ⁽³⁾と推察する。プラトンは、どのような理由でそのように推察するのだろうか？ 彼は、推察の理由として、互いに関連する三つの議論を展開する。すなわち、①ミメシスの本質に関する議論(595B-602B) ②ミメシス詩が魂の劣った部分に影響を与えたとする議論(602C-605C) ③ミメシス詩は「最もすぐれた人たち」(哲人王候補者)をもそこなうほどの同化力をもつことを示す議論(605C-607A)である。以下において議論を一つずつ吟味していくことにしたいが、その前に確認しておくべきことが二つある。

一つは、「聴いている人たち」とは、先の吟味から見て、だれであれ聴いている人たちということではなく、中等教育以上のレベルで数学的諸学科や、さらにはディアレクティケーを学ぶことになる若者たちを指すと理解するのが妥当であると思われる。そうであるならば、なぜミメシス詩は聴衆の心を損なうのかという問いは、より正確には、なぜミメシス詩は中等教育以上のレベルで学習する哲人統治者候補者たちの思考を損なうのか、ということになるであろう。そのレベルの学習は、理知的部分の育成を目的とする。

ここでのプラトンの関心は、そのような学習レベルにある人たちに集中していると思われる。彼が使う *διάνοια* という用語も、これと符合する。第VI巻における彼の説明によると、*διάνοια* は数学的諸学科にたずさわる人たちの心のあり方、すなわち「悟性的思考」を表す用語であり、それは「思わく」(*δόξα*)と「知性的思考」(*νοῦς*)との中間に位置づけられるものであった。同じように、第VII巻の説明でも、*διάνοια* は、「思わく」(*δόξα*)よりは明瞭で、「知識」(*ἐπιστήμη*)よりは不明瞭なものに関わる数学的諸学科にふさわしい呼び名であった。真に *ἐπιστήμη* という呼び名にふさわしいのは、ディアレクティケーなのであった。⁽⁴⁾

もう一つは、「聴いている人たちの心を損なうもの」と批判するとき、プラトンが主に考えているのは、ホメロスであると思われる。一方では、子どもの頃から自分をとらえてやまなかったホメロスへの愛と畏敬を告白しつつも、他方では、一人の人間が真理よりも尊重されるようなことがあってはならないと、プラトンは自戒の念を込めて語る。このようにしてプラトンは、ホメロス批判へと乗り出すのである。これらの点を確認した上で、それぞれの議論の吟味に進むことにしたい。

II. ミメシスの本質に関する議論

第一の議論は、ミメシスの本質に関する議論である (595B-602B)。プラトンは、「ミメシスとは、実際のところ、そもそも何であるか」(*μίμησιν ὄλωσιν…… ὅτι ποτ' ἐστίν;*, 595C) と問う。この問いは、ミメシス全般についてその一般的な性質を探そうとするものではなく、今問題として考察している類のミメシス詩におけるミメシスの性質に限定して、ミメシスの性質を解明しようとするものであろう。第VI巻においてプラトンが語った、哲学者がイデアに対して行うミメ

シスは、ここでは含まれていないと思われる。そこでは、ソクラテスはアデイマントスに次のように語った。

*οὐδὲ γάρ που, ὦ Ἀδείμαντε, σχολῇ
τῷ γε ὡς ἀληθῶς πρὸς τοῖς οὔσι τὴν
διάνοιαν ἔχοντι κάτω βλέπειν εἰς
ἀνθρώπων πραγματείας, καὶ
μαχόμενον ἀντοῖς φθόνου τε καὶ
δυσμενείας ἐμπίμπλασθαι, ἀλλ' εἰς
τεταγμένα ἄττα καὶ κατὰ ταῦτ' ἄει
ἔχοντα ὀρῶντας καὶ θεωμένους οὔτ'
ἀδικοῦντα οὔτ' ἀδικούμενα ὑπ'
ἀλλήλων, κόσμῳ δὲ πάντα καὶ κατὰ
λόγον ἔχοντα, ταῦτα μιμεῖσθαι τε καὶ
ὄτι μάλιστα ἀφομοιοῦσθαι. ἢ οἴει
τινὰ μηχανὴν εἶναι, ὅτ' τις ὀμιλεῖ
ἀγάμενος, μὴ μιμεῖσθαι ἐκεῖνο;*

というのは、思うに、アデイマントスよ、少なくとももろもろの真実在にほんとうにその精神を向けている人には、下を向いて人間たちのもろもろの事柄に目をやり、人間たちと争いつつ妬みと敵意に心を満たされている暇などないのだ。いや、彼のような人たちは、秩序づけられておりかつ常に同じあり方をしているもろもろの存在を見続け、それらが互いに不正を行うことも行われることがなく、それらのすべてが秩序の状態にあり理法に従っているのを観照しつつ、それらの存在を真似し続け、できるだけ自分をそれらと似たものにしようと努めるのだ。人が何であれ感嘆の気持ちをもって交わるものに対しては、それを真似せずにいられると思うかね?⁽⁵⁾

プラトンは、哲学者がイデアに対してミメシスを行うことについては、これを受け入れている。彼はミメシスそのものを完全否定することをしない。ミメシスは、人間の内に自然本来備わる性質だからである。し

かも、哲学者のミメーシスは、自分自身の人間形成のみならず他者の人間形成にも貢献するからである。彼が拒むのは、アイデアからは遠く離れたものに対してミメーシスを行い、それゆえに聴衆の心に悪い影響を及ぼすと思われる類のミメーシス詩に特有なミメーシスである。プラトンの考えでは、ミメーシスそのものは、善でも悪でもなく中立のものである。それが善きものを真似るとき善いミメーシスとなり、悪いものを真似るとき悪いミメーシスとなるのである。彼が今ここで吟味しようとするのは、後者である。

先のミメーシスに関する問いに戻ろう。この問いは、ムッシケー中高等教育のレベルにある哲人統治者候補の若者たちにとって適切である。ムッシケー中高等教育プログラムは、数学的諸学科の自由な学習にはじまり、さらに数学的諸学科の総合的訓練、ディアレクティケーの持続的集中的学習へと進み、ついには善のアイデアの認識に至ることを目指すものであった。そこにはミメーシス詩のための場所はまったくなかった。そして、とどめを刺すかのように、プラトンはX巻冒頭において、ミメーシス詩を完全に拒絶する。なぜだろうか？ この疑問は、ホメロスの詩の学習を含むムッシケー初等教育を終えたばかりの若者たちにとって自然なものであるだろう。プラトンも「子どもの頃からぼくをとらえているホメロスへの愛と畏れ」を告白しているように、若者たちの多くはホメロスの魅力にとらえられているはずである。哲人統治者を目指す教育課程において数学的諸学科とディアレクティケーの学習が必要なことは認めるにせよ、なぜミメーシス詩を愛することはいけないのか？ ミメーシス詩にも人間形成に役立つ要素があるのではないか？ このような疑問は、中等教育課程の若者たちだけではなく、それより上の教育課程の中にある多くの青年たちに共通するものであろう。プラトンは、この疑問に答える必要がある。答の中

には、ミメーシス詩の特徴をなすミメーシスとはそもそも何であるか、ミメーシスは善のアイデアの認識に関してどのような位置にあるのか、哲人統治者になるための学習に関してホメロスはどのような知識や技術を教えてくれるのか、というようなことが含まれなければならないはずである。

結論を先取りするならば、以下のようになる。すなわち、ミメーシスを行う者(μμητής)は、「本性(実在)から数えて第三番目に遠い作品を生み出す者」(τὸν τοῦ τρίτου ἄρα γεννήματος ἀπὸ τῆς φύσεως, 597E)であり、「真実(実在)という王から数えて第三番目に遠く生まれついている者」(τρίτος τις ἀπὸ βασιλέως καὶ τῆς ἀληθείας πεφυκώς, 597E)である。「ミメーシスの技術は、真実から遠く離れたところにある」(πόρρω ἄρα που τοῦ ἀληθοῦς ἡ μιμητικὴ ἐστίν, 598B)。「ミメーシスを行うことは、真実から数えて第三番目に遠いものと関係する」(τὸ δὲ δὴ μιμεῖσθαι τοῦτο οὐ περὶ τρίτον μὲν τί ἐστίν ἀπὸ τῆς ἀληθείας, 602C)。「ミメーシスに従事する人は、言うに値することを何一つ知っていない」(τόν τε μιμητικὸν μηδὲν εἰδέναι ἄξιον λόγου περὶ ὧν μιμεῖται, 602B)。そして、「最大限にミメーシスに従事している人々」(μιμητικοὺς ὡς οἶόν τε μάλιστα, 602B)が悲劇作家たちであり、その筆頭がホメロスである。「つまり、真実在(エイダスあるいはアイデア)との距離の見地からは、ミメーシスは真実在から遠く離れており、それにいささかも触れることがない。要するに、「ミメーシスは、遊びのようなものであり、真剣に従事することではない」(εἶναι παιδιάν τινα καὶ οὐ σπουδὴν τὴν μίμησιν, 602B)。したがって、善のアイデアの認識と哲人統治者になることを目指す、ムッシケー中高等教育課程の中にある若者たちにとっては、ミメーシスもミメーシス詩も不要なものであり、ひいてはホメロスも不要なも

のだとということになる。ホメロスは、一般の人たちから、神々や英雄たちや人間たちについてあらゆることを知っている人物と考えられているが、彼は、実は、それらに対してミメーシスを行っているだけであり、それらの真実についてはまったく無知なのである。

さて、「ミメーシスとは、実際のところ、そもそも何であるか」(*μίμησιν ὁλως…… ὅτι ποτ' ἐστίν;*) という問いは、文脈上は、ソクラテスがグラウコンに向けたものである。答をためらうグラウコンに対してソクラテスは、「くっきりと見えている人たちよりぼんやりと見えている人たちのほうが先に見つけることが、実にしばしばあるものだ(*πολλά τοι ὀξύτερον βλέπόντων ἀμβλύτερον ὁρῶντες πρότεροι εἶδον*)」と語る。しかし、グラウコンはソクラテスに、「しかしあなたがここにいるのですから、たとえ私に何かが見えてくるにしても、すすんでそれを言おうとする気持ちにもなれないでしょう。そうではなく、あなた自身に見ていただかなければ」(*ἀλλὰ σοῦ παρόντος οὐδ' ἂν προθυμηθῆναι οἷός τε εἴην εἰπεῖν, εἴ τί μοι καταφαίνεται, ἀλλ' αὐτὸς ὄρα*)⁽⁸⁾と主張する。ここで注目すべきは、プラトンが見ることを意味する言葉を5回も使っている点である。ミメーシス詩は、見ることよりもむしろ聞くことに関わるにもかかわらず、プラトンは見るということを強調する。なぜだろうか? いくつかのことが考えられる。まず始めに、見ることの強調は、プラトンがこれからミメーシスの例として取り上げようとする画家のミメーシスにたいする伏線の役割を果たす。画家およびその作品は、見ることにかかわる。次に、ミメーシス詩には聴く要素だけではなく見る要素も備わっている。悲劇・喜劇においては、台詞とあいまって俳優の仮面やしぐさ、およびコロスの踊りのような視覚的要素が、観衆の心の目にイメージをもたらす。抒情詩においても、歌詞とあいまってコロスの踊りが、観衆の心

に強い印象をもたらす。それらに比べて叙事詩においては、視覚的要素が少ないけれども、吟唱詩人はミメーシスによるレクシスを巧みに操ることによって、聴衆の心に強い印象を与えることができる。つまり、ミメーシス詩を聴くということは、単に耳で聞くということではなく、耳と目および体と心の全体がそれにさらされることによって、心の目が何らかのイメージを見るということなのである。さらに、見ることを強調することによって、プラトンは *εἶδος* を視野に入れているのではないかと思われる。見ることを強調したすぐ後で、プラトンはミメーシスの本質を探究するにあたり、その出発点として *εἶδος* 論を取り上げる (596A 1)。ギリシャ語において見ることと知ることとは、語源上の結びつきをもつ。さらに、Ⅶ巻の洞窟の比喩(514A-518A)が示すように、肉体の目で見ることは魂の目で見ることの比喩として用いられ、魂の目で見ることの究極目的は善のイデアを観想することである。*εἶδος* を見ることに⁽⁹⁾関して、ミメーシスはどれほどのことをすることができるのかを、プラトンは明らかにしたいのである。

Ⅲ. 独特の *εἶδος* 論

プラトンが、ミメーシス詩におけるミメーシスの本質を探求するための出発点として用いるのが、独特の *εἶδος* 論である (595B-602B)。

*βούλει οὖν ἐνθένδε ἀρξώμεθα
ἐπισκοποῦντες, ἐκ τῆς εἰωθυίας
μεθόδου; εἶδος γὰρ ποῦ τι ἐν ἕκαστον
εἰώθαμεν τίθεσθαι περὶ ἕκαστα τὰ
πολλά, οἷς ταύτων ὄνομα ἐπιφέρομεν.*

それでは、われわれは、考察するにあたり、いつもの方法で次のことから始めることにし

よう。すなわち、われわれが同じ名前を与えるそれぞれの多くのものについて、いわばそれぞれ一つの「実相」（エイドス）を仮定するのが、思うに、われわれのいつものやりかた⁽¹⁰⁾だ。

プラトンは、すぐ後でエイドスをアイデア（*ιδέαι*, 596B）と⁽¹¹⁾言い換える。彼は、このエイドスまたはアイデアに基づく探求方法について、これを「いつもの方法」（*τῆς εἰωθυίας μεθόδου*）であるとも、「われわれがいつもやってきている」（*εἰώθαμεν*）とも言うが、それは、グラウコンのような将来の哲人候補の若者たちを念頭に置いているからであろう。プラトンのムッシケー高等教育においては、このような若者たちは日頃この種の探求方法に慣れ親しんでいるはずなのである。プラトンのソクラテスは、V巻475 E以下におけるグラウコンとの対話においても、グラウコンがすでにエイドスの話しに通じているものとみなし、ことさらにそれについて論証することをしなかった（475 E）。それも同じ理由によるものであろう。

さて、そこで取り上げられたのは、美・醜、正・不正、善・悪といった属性にかかわるエイドスであつた⁽¹³⁾。それに対して、X巻では寝椅子やテーブルといった人工物にかかわるエイドスが取り上げられる。このように〈多くのものについてそれぞれ一つのエイドス〉という仕方でエイドスがとりあげられるのは、『国家』篇ではこの箇所だけである。プラトンは『ピレボス』16 C-D と『第7書簡』342 D において、〈あらゆるものエイドス〉に言及はするが、『パルメニデス』130 C-D においては、そのようなエイドスを措定することの困難さを認めている。Adam は、プラトンが人工品についてもエイドスの存在を信じていたと⁽¹⁴⁾考える。P. Murray は、プラトンは本気でそのようなエイドスを信じているのではなく、むしろ議論の便宜のために措定しているのだと

⁽¹⁵⁾考える。しかし、ここで大事な点は、そのようなエイドスを信じていたか信じていなかったかということではなく、なぜプラトンはそのようなエイドスを措定したのかということであろう。M. F. Burnyeat は、『国家』篇III巻においてソクラテスが語る二つの国家の話⁽¹⁶⁾しに照らして、この問題の解明を試みる。すなわち、二つの国家のうち一方は質素な国家であり、他方は贅沢な国家である。

質素な国家とは、以下のようなものである。

*πρῶτον οὖν σκεψώμεθα τίνα
τρόπον διαιτήσονται οἱ οὕτω
παρεσκευασμένοι. ἄλλο τι ἢ σιτόν τε
ποιοῦντες καὶ οἶνον καὶ ἱμάτια καὶ
ὑποδήματα; καὶ οἰκοδομησάμενοι
οἰκίας, θέρους μὲν τὰ πολλὰ γυμνοί
τε καὶ ἀνυπόδητοι ἐργάσονται, τοῦ
δὲ χειμῶνος ἡμφιεσμένοι τε καὶ
ὑποδεδεμένοι ἱκανῶς • θρέψονται δὲ ἐκ
μὲν τῶν κριθῶν ἀλφίτα
σκευαζόμενοι, ἐκ δὲ τῶν πυρῶν
ἄλευρα, τὰ μὲν πέψαντες, τὰ δὲ
μάξαντες, μάζας γενναίας καὶ
ἄρτους ἐπὶ κάλαμόν τινα
παραβαλλόμενοι ἢ φύλλα καθαρὰ,
κατακλινέντες ἐπὶ στιβάδων
ἐστρωμένων μίλακί τε καὶ μυρρίναις,
εὐωχῆσονται ἀντοί τε καὶ τὰ παιδιά,
ἐπιπίνοντες τοῦ οἴνου,
ἐστεφανωμένοι καὶ ἕμνοντες τοὺς
θεούς, ἠδέως συνόντες ἀλλήλοις, οὐχ
ὑπὲρ τὴν οὐσίαν ποιούμενοι τοὺς
παῖδας, εὐλαβοῦμενοι πενίαν ἢ
πόλεμον.*

最初に、このような状態にある人たちがどのように暮らすだろうかを、観察してみるとしよう。彼らは穀物やワインや、衣服や履き物を作って暮らすのではないだろうか。

そして、家を建て、夏はたいい裸・裸足で、冬は十分に着込み履き物も履いて、働くことだろう。彼らは身を養うために、大麦から大麦粉を、小麦から小麦粉を作って、後者は焼き、前者は捏ねるであろう。彼らは、すばらしい大麦生パンと小麦パンとを葦やきれいな木の葉の上に盛り合わせるだろう。そして、くず草やてんにんかを敷いて作った床に身を横たえて、自分たちも子どもたちも食事を楽しむであろう。その後、ワインを飲み、頭に花の冠をかぶり神々を賛美するであろう。その上で、彼ら男女は互いに性交を楽しむだろう。財産以上に子どもたちを作らない程度にね。⁽¹⁷⁾ 貧乏や戦争に陥らないためだ。

パンとワインの質素な食事、賛美の歌、そして責任ある性交という順序は、やがてソクラテスがV巻において提案することになる、最もすぐれた男女に許される生殖の祭りを予想させる。⁽¹⁸⁾ 不満げなグラウコンにソクラテスは、パンとワインだけではなく、質素なおかずやデザートも供されることを語るが、グラウコンはそれでも不満である。

καὶ ὅς, εἰ δὲ ἰῶν πόλιν, ᾗ
Σώκρατες, ἔφη, κατεσκευάζεις, τί ἂν
αὐτὰς ἄλλο ἢ ταῦτα ἐχόρταξες;

そこでグラウコンは言った。「そのようなものは、ソクラテス、あなたが豚たちの国家を建設するとして、豚たちに食べさせるものと同じではないでしょうか？」⁽¹⁹⁾

古代ギリシャ人にとって、豚は無知の象徴であった。ソクラテスも、豚をその意味で用いている。グラウコンが言いたいことは、そのような国家は、文化国家からはほど遠いということであろう。⁽²¹⁾ 彼はむしろ、日頃慣れ親しんでいる文化的生活を望む。

ἄπερ νομίζεται, ἔφη • ἐπὶ τε κλιῶν
κατακεῖσθαι οἴμαι τοὺς μέλλοντας μὴ
ταλαιπωρεῖσθαι, καὶ ἀπὸ τραπεζῶν
δειπνεῖν, καὶ ὄψα ἄπερ καὶ οἱ νῦν
ἔχουσι καὶ τραγήματα.

「習慣となっていることをです」と、彼は言った。「思うに、みじめな思いをしたくない人たちは、寝椅子の上に横になり、食卓から食事をしなければなりません。今の人たちが食べているようなごちそうやデザートを食べなければなりません。」⁽²²⁾

第二の国家においては、寝椅子と食卓とが、文化的生活に欠かせない一組として語られる。⁽²³⁾ それらはシユムポシオンにおいて用いられるものである。⁽²⁴⁾ この文化的食事会のためには、さらに多くの品目が必要であるとされるが、ここでは男性たちは妻を持ち、妻たちは当時の慣習に従って家の奥にとどまり、食事会には参加しないことが前提とされている。寝椅子と食卓の他に、以下のような品目が加えられる。その他の家具、ごちそう、香油、香、高級娼婦(ἑταίραι)、菓子など。しかも、それぞれ種々さまざまなものである。さらには、壺用の絵や食堂用の壁絵、刺繡、金や象牙、その類の装飾品などである。⁽²⁵⁾ そうなると、国家をもっと大きくしなければならなくなる。質素な生活に必要なものだけで満足せず、豊かな生活のためにさまざまなものを詰め込まなくてはいけなくなるからである。かくして、「贅沢な国家」(τρυφῶσαν πόλιν) が誕生する。それは第一の「真実の国家」(ἡ ἀληθινὴ πόλις)、すなわち「いわば健康な国家」(ὕγιης τις) に対して、いわば「熱に冒された国家」(φλεγμαίνουσαν πόλιν)⁽²⁶⁾ である。そこでは、食卓を飾るごちそうのためあらゆる種類の猟師たちや、シユムポシオンに添える楽しみのためミメーシスの仕事をする人たちが必要となる。後者としては、画家たちやムウシケー

にたずさわる人たちである。すなわち、詩人、叙事詩吟唱家、俳優、コロス舞踏家、興行請負人などである。他にも、贅沢な品目が続々と挙げられる。⁽²⁷⁾さらに、贅沢国家は自国の物では足りず、他の国の物にも手を伸ばし、かくして戦争が起こる。プラトンが『国家』篇II巻とIII巻において展開するムウシケー教育論は、いわば熱に冒されたような贅沢国家を順を追って浄化し、「豚の国家」のような真実な国家、すなわち健康な国家へと回復しようと試みる国家浄化論の役割を果たすのである。⁽²⁸⁾

II巻・III巻における贅沢国家の浄化において、浄化されるべき品目の筆頭に來るものが、寝椅子と食卓であることを確認した上で、X巻に戻ることにしよう。X巻は、長きにわたる国家浄化の過程の仕上げともいえる部分であり、特にミメーシス詩拒絶が主題として取り上げられる。ミメーシス詩拒絶論を展開するにあたり、ミメーシスとは何かを明らかにしておく必要がある。そこでソクラテスが持ち出すのは、いつもの探求法としてのエイドス論である。そして、エイドスの例として取り上げられるのが、寝椅子と食卓のアイデアなのである。II巻・III巻における贅沢国家の象徴とも言える寝椅子と食卓を想起せずにはいられない。贅沢国家の浄化、すなわち真実の国家の完成にあたり、ソクラテスの考えでは、寝椅子と食卓の浄化がきわめて大事なのである。その理由はII巻・III巻からある程度示唆されるが、さらに理解を深めるために、当時のギリシャにおける文化的な生活において寝椅子と食卓が、どのような位置をしめていたかを見ておくことにしたい。⁽²⁹⁾

寝椅子(κλίση)という言葉とそれに横になる習慣は、ホメロスには確認されない。ホメロスの英雄たちは、椅子に座って食事をする。横になって食事をする習慣はおそらく近東に由来するものと推定される。⁽³⁰⁾この習慣は、ギリシャでも前7世紀には定着した。寝椅子と

それに横たわる作法は、いわば上流社会の特徴だった。たとえば、前422年の作品、アリストパネス『蜂』において、平民階層出身のピロクレオンという老人が、想像上のシムポシオンの場でいかに優雅に寝椅子に横たわるかについて難渋する場面がある。

1208 {Bδ.} παύ' ἀλλὰ δευρὶ
κατακλινεῖς προσμάνθανε

1209 ξυμποτικὸς εἶναι καὶ
ξυνουσιαστικός.

1210 {Φι.} πῶς οὖν
κατακλινῶ; φράζ' ἀνύσας.

1210 {Bδ.}

εὐσχημόνως.

1211 {Φι.} ὡδὶ κελεύεις
κατακλινῆναι;

1211 {Bδ.}

μηδαμῶς.

1212 {Φι.} πῶς δαί;

1212 {Bδ.} τὰ γόνατ'
ἔκτεινε, καὶ γυμναστικῶς

1213 ἵγρὸν χύτλασον σεαυτὸν ἐν
τοῖς στρώμασιν.

1214 ἔπειτ' ἐπαίνεσον τι τῶν
χαλκωμάτων,

1215 ὀροφῆν θέασαι, κρεκάδι'
αὐλῆς θαύμασον.

1216 ὕδωρ κατὰ χειρός τὰς
τραπέζας εἰσφέρειν

1217 δειπνοῦμεν ἀπονεύιμεθ' ἤδη
σπένομεν.

1218 {Φι.} πρὸς τῶν θεῶν,
ἐνύπνιον ἐστιώμεθα;

ブデリュクレオン もう結構です。だがここに横になって飲み仲間となり、人づき合いをよくすることを習ってください。

ピロクレオン どういう風にだね。さっそく話して貰おう。

ブデリュクレオン 体裁よくですよ。
 ピロクレオン こういうぐあいに横になる
 のかね。
 ブデリュクレオン とんでもない。
 ピロクレオン じゃどうするんだ。
 ブデリュクレオン 膝をのばしていかにも
 慣れきったように楽々とクッションのなかに
 沈み込む。それから、まあ食器を褒める。天
 井を見る。ホールにかかっている織物をみご
 とですなと言う、ところへ手洗いの水。食卓
 が運びこまれる。食事をする。食後の潔めの
 水。さあ今度は神々への捧物と来る。
 ピロクレオン こりゃ驚いた。夢の中で宴
 会をやっているのか。⁽³¹⁾

この記述から、寝椅子と食卓は、上流社会
 の洗練された交際に入るために選ばれた必須
 項目であることがわかる。それらは単に飲食
 のためだけではない。食後に、歌遊びをする
 のか、それとも他のもっと洗練された文化的
 営みをするのかという選択を設定するのであ
 る。寝椅子と食卓の存在は、どのような仕方
⁽³²⁾でシュムポシオンを行うかという選択につな
 がり、ひいてはどのような仕方でもポリス社会
 の文化を発展させるかという設定につながる。
 『法律』篇I巻において語られるように、
 シュムポシオンの正しいしきたりがとりもな
 おさず正しい教育につながり、ひいては正しい
 文化国家の形成につながるというのが、プラ
 トンの考えなのである。⁽³³⁾そして、よい文化
 を選ぶのか、それとも悪い文化を選ぶのかと
 いう問題は、『国家』篇が探求する中心問題で
 あった。

前425年の作品、アリストパネス『アカル
 ナイの人々』において、使者がディカイオポ
 リスを宴会に急がせるにあたり、魅力的な物
 品を詳しく述べるくだりがある。

1085 {AG.}

Ἐπὶ δεῖπνον

ταχὺ

1086 βάδιζε τὴν κίστην λαβῶν καὶ
 τὸν χοᾶ.

1087 Ὁ τοῦ Διούσου γὰρ ῥ' ἱερεὺς
 μεταπέμπεται.

1088 Ἄλλ' ἐγκόνοι· δειπνεῖν
 κατακωλύεις πάλαι.

1089 Τὰ δ' ἄλλα πάντ' ἐστὶν
 παρεσκευασμένα,

1090 κλῖναι, τράπεζαι,
 προσκεφάλαια, στρώματα,

1091 στέφανοι, μύρον, τραγήμαθ',
 — αἱ πόρνοι πάρα, —

1092 ἄμυλοι, πλακοῦντες,
 σησαμοῦντες, ἴτρια,

1093 ὀρχηστρίδες, τὸ Φίλταθ'
 Ἄρμόδι' οὐ πάλαι.

1094 Ἄλλ' ὡς τάχιστα σπεῦδε.

使者 宴会へと急いでおいでください。重
 箱と徳利をお忘れなく。ディオニュソスの神
 官があなたを待っておられる。さあお急ぎの
 ほどを。あなたのためにだいぶ宴会が遅れて
 おります。用意は万端手落ちなく整い、寝椅
 子に食卓、枕に敷蒲団、花冠(かむり)に香
 油、種々(くさぐさ)のご馳走、それに白首
 まで待ってますぜ。押麦菓子に蜜入りパン、
 胡麻せんべいにウェーファース、ハルモディ
 オスの大好物のべっぴんの踊り子たちときて
 まさあ。さあ、一生懸命急いだし。⁽³⁴⁾

寝椅子と食卓とは、宴会に必要な項目の筆
 頭に挙げられている。ここで、『国家』篇X巻
 においてミメシスの本質を明らかにする議
 論のために選ばれるのは、絵画に描かれた寝
 椅子であることを思い出したい(596E)。その
 ような寝椅子は、飲食の情景を描いた絵画の
 中に見いだされるはずである。そして、飲食
 の情景は、詩を連想させる。宴会とシュムポ
 シオンには、詩を歌うことがつきものであつ

たからである。第II巻においてまず前置きとして食事の話が語られた後、続いてムシケーに関する長い議論が始まるのは、当時のギリシャ人にとってはよくわかることだったはずである。先に、豚の国家では神々への讃歌のみが歌われたことを見たが、それに対して、文明化したギリシャ世界では、祝祭、供犠、宴会、シムポシオンなどの社会的集まりの折に叙事詩、抒情詩、さらには悲劇が歌われたことが現存する文献から知られる。「ハルモディオスの大好物」(τὸ Φίλταθ' Ἀρμόδι' οὐ) という句における Φίλταθ' Ἀρμόδι' οὐ は、「いとも愛すべきハルモディオス」という意味であるが、これは、ハルモディオスとアリストゲイトンという有名な愛人たちを讃えるある酒歌(σκόλιον)を書き換えた言葉の遊びである。歌は次のように始まる。⁽³⁷⁾

ἐν μύρτου κλαδὶ τὸ ξίφος φορήσω
ὥσπερ Ἀρμόδιος κάριστογείτων
ὄτε τὸν τύραννον κτανέτην.
ἰσονόμους τ' Ἀθήνας ἐποίησάτην.

私はてんにんかの枝の中に剣を運ぼう
ハルモディオスとアリストゲイトンのように
彼らが僭主を殺し
そしてアテナイを平等権の国とした時

これに対する応答は以下のとおりである。

φίλταθ' Ἀρμόδι', οὐ τί που τέθνηκας.
νίσοις δ' ἐν μακάρων σέ φασιν εἶναι.
ἵνα περ ποδώκης Ἀξιλεὺς
Τυδεΐδην τέ φασιν Διομήδεα.

いとも愛すべきハルモディオスよ、いや、
あなたは死んだはずがない
あなたは幸いな人たちの島々の中にいと
人々は言う

そこには早足のアクレウスが
そして、テュデウスの息子ディオメデスが
いと人々は言う

本来は「いとも愛すべきハルモディオスよ、いや、」(φίλταθ' Ἀρμόδι', οὐ) とあるところを、アリストパネスは、「ハルモディオスのいとも愛する」(φίλταθ' Ἀρμόδιου) と書き換え、ハルモディオスは踊り子たちを愛したことを示唆するのである。しかし、この酒歌の中で大事なことは、ハルモディオスとアリストゲイトンとがアテナイを平等権の(ἰσονόμους) 国にしたという点である。Ἴσονομία, すなわち法の前の平等は、アテナイ民主主義が民衆を風靡するのに用いた専門用語であった。シムポシオンと宴会が文化を世々に伝える重要な場であった時代であって、そのような場でハルモディオスの歌を歌うことがどういう意味をもっていたかは、容易に察しがつく。

それは、祝いであることはもちろんだが、それを歌うたびに、アテナイの伝統である民主主義を確証するものであった。18歳くらいの若者たちが、最初に社会人の仲間入りをするのは、シムポシオンにおいてであった。そこで歌われる歌は、いわば共通の通貨であった。シムポシオンの場において若者たちは、神々や英雄たちの話を聞き、それによってポリスの基礎を固める忠誠心、信念、知識が育まれたのである。この社会教育の主な手段として用いられたのが、食卓から食事が片づけられた後、一同が寝椅子に心地よく横たわりながら聞いた、あるいは歌った詩なのである。⁽³⁸⁾

国家X巻の冒頭においてソクラテスは、ミメシス詩を拒絶する理由を示すために、ミメシスの本質は何であるかという問題を設定し、問題の解明のためエイドスによる探求方法を提案した。彼がエイドスの例として選んだのは、寝椅子のアイデアと食卓のアイデアで

あった(596A-B)。なぜこれらのアイデアを選んだのかということは、以上において見たギリシャにおける寝椅子と食卓がもつ文化上の意義に照らすときよく理解できる。『国家』篇を貫く主題は、哲人統治者の人間形成のためのムシケー生涯学習をどのように行うかということであった。ムシケーはパイディアとほぼ同義語であり、ともにポリス市民に必要な文化・教養を意味した。ソクラテスはIX巻の終わりのところで、『国家』篇においてこれまで言論によって建設してきた国家は、地上のどこにも存在しないと語った後、次のように続ける。

ἀλλ', ἦν δ' ἐγώ, ἐν οὐρανῷ ἴσως
 παράδειγμα ἀνάκειται τῷ
 βουλομένῳ ὄρᾶν καὶ ὄρωντι ἑαυτὸν
 κατοικίσειν.

「しかし」とぼくは言った、「それはおそらく天に一つの範型として備えられている。それを見ようと望み、それを見ながら自分自身をその国家へ移住させようと望む人のために⁽³⁹⁾ね。」

κατοικίσειν を文字どおり「(植民地に)移住させる⁽⁴⁰⁾」の意味にとるのがよいと思われる。哲学者とは、ディアレクティケーによって自分自身の魂を真実在に向け変え、それに向かって上昇させる営みをたゆむことなく続ける人のことであるが、その営みはいわば天にある「美しいポリス」(τῇ καλλιπόλει, 527C)へ向かって移住していく道行であると言うこともできるだろう。その道行の中で、理想国に似つかわしいあり方が少しずつ哲学者の魂の中に形成されていくのである。⁽⁴¹⁾

おそらくこのような魂の向け変え・上昇の観点から、寝椅子のアイデアと食卓のアイデアの例はよく理解できるのではないかと思われ

る。

οἰκοῦν καὶ εἰώθαμεν λέγειν ὅτι ὁ
 δημιουργὸς ἐκατέρου τοῦ σκεύους
 πρὸς τὴν ἰδέαν βλέπων οὕτω ποιεῖ ὁ
 μὲν τὰς κλίνας, ὁδὲ τὰς τραπέζας,
 αἷς ἡμεῖς χρώμεθα, καὶ τὰλλα κατὰ
 ταῦτά; οὐ γὰρ που τὴν γε ἰδέαν
 αὐτὴν δημιουργεῖ οἰδεῖς τῶν
 δημιουργῶν πῶς γάρ;

ところで、また次のように言うのがわれわれのいつものやり方ではないかね、すなわち、それぞれの家具の製作者はアイデアに目を向けながら、一方は寝椅子を作り、他方は食卓を作るのであり、それらを使うのはわれわれなのだ、そして他の製品についても同様なのだ、⁽⁴²⁾とね。

家具職人がアイデアを見ながら家具をつくるという考えは、アイデアに関するプラトンの考えとしてはめずらしい⁽⁴³⁾。この困難に対して、家具職人が見るアイデアとは彼が作ろうとしている家具の特徴・性質に関する「精神上の想像図」という程度の意味であるというような説明がなされる⁽⁴⁴⁾。しかしながら、このような説明はやや的を外しているように思われる。先に見たように、『国家』篇X巻におけるプラトンの関心事は、これまで言論のうちに建て上げてきた、ムシケー・パイディアの観点から見たポリス論の仕上げをどうするか、なにかんづく、ミメーシス詩の取り扱いをどうするかということであった。つまり、文字どおり家具職人がアイデアを見ながら家具を作ることではなく、哲学者が善のアイデアを見ながら、すぐれた文化・教養を具えたポリスを自分自身の魂の中に、そして哲人統治者候補の人たちの魂の中に作るということが、大事なのであった。

IV. 画家としての哲学者

ソクラテスは、寝椅子製作者と食卓製作者に続いて、「手仕事職人たちの一人一人が作るかぎりのものを、すべて何でも作るような製作者（ὅς πάντα ποιεῖ, ὅσαπερ εἷς ἕκαστος τῶν χειροτεχνῶν, 596C）」に言及し、その例として「画家」（ὁ ζωγράφος, 596E）を挙げる。そして、画家が何であるかを明らかにした後、それを「悲劇詩人」（ὁ τραγωδοποιός, 597E）に適用する。さらに、悲劇詩人が何であるかを明らかにした後、それを「悲劇と、悲劇の指導者であるホメロス」（τὴν τε τραγωδίαν καὶ τὸν ἡγεμόνα αὐτῆς Ὅμηρον, 598D）に適用する。こうして、プラトンはミメーシス詩批判の核心に至るのである。プラトンが最初に画家の例を取り上げるのには、意図があると思われる。すなわち、彼はVI巻において理想国家を構築する哲学者の営みを画家の営みにたとえたが、プラトンはX巻のこの箇所において、VI巻の哲学者としての画家に照らして、ミメーテースとしての画家の本質を明らかにしようとしているのではないと思われる。哲学者としての画家が語られたのは、たしかに哲人統治者の実現は困難ではあるけれども、しかしながら、もし第一級の哲学者が、国家のことを配慮するように何らかのかたちで強制されるなら、その実現は不可能ではないという文脈においてであった（499B-D）。そこでは、真実の哲学を志す者は、もろもろの真実在に目を向け、それらを観照しつつ、「それらの存在に自分自身を似せるとともに、できるだけ同化しようとする」（ταῦτα μιμεῖσθαί τε καὶ ὅτι μάλιστα ἀφομοιοῦσθαι, 500C）ことが語られた。感嘆すべきものを目のあたりにして、哲学者はそれを真似しないではおられないのである。しかも、真実在のミメーテースとしての哲学者は、自分自身のことだけでなく他の人たち、特に哲人統治者候補の若者たち

のためにも配慮をしなければならないのであった。

ἄν οὖν τις, εἶπον, αὐτῷ ἀνάγκη
γένηται ἃ ἐκεῖ ὄρᾳ μελετῆσαι εἰς
ἀνθρώπων ἥθη καὶ ἰδίᾳ καὶ δημοσίᾳ
τιθέναι καὶ μὴ μόνον ἑαυτὸν
πλάττειν, ἄρα κακὸν δημιουργὸν
αὐτὸν οἶει γενήσεσθαι σωφροσύνης
τε καὶ δικαιοσύνης καὶ συμπάσης τῆς
δημοτικῆς ἀρετῆς;

そこで、とぼくは言った。もし哲学者に何らかの強制が起こり、彼がそこで見るもろもろの真実在を人間たちの品性の中に私的にも公的にも置くという仕事に従事しなければならず、ただ自分自身を形成するだけではないとしたら、はたして彼は、節制や正義やその他、民衆に関わるありとあらゆる徳の、⁽⁴⁵⁾悪い制作者になるだろうと君は思うか？

プラトンは、このような任務を課せられる哲学者を「制作者」（δημιουργὸν）と呼ぶが、彼が考えているのは以下のように画家（ζωγράφοι）のイメージである。

ἀλλ' ἐὰν δὴ αἴσθωνται οἱ πολλοὶ ὅτι
ἀληθῆ περὶ αὐτοῦ λέγομεν,
χαλεπανοῦσι δὴ τοῖς φιλοσόφοις καὶ
ἀπιστήσουσιν ἡμῖν λέγουσιν ὡς οἶκ
ἄν ποτε ἄλλως εἰδαιμονήσειε πόλις,
εἰ μὴ αὐτὴν διαγράψειαν οἱ τῷ θεῷ
παραδείγματι χρώμενοι ζωγράφοι;

しかし、われわれが哲学者について語っていることが真実であるということに大衆が気づくならば、はたして彼らは哲学者たちにつらく当たるだろうか、そして神的な範型を用いる画家たちがその輪郭を描くのでないかぎり、一つのポリスはけっして幸福になること

はできないのだと言うわれわれの言葉を信じないということがあるだろうか⁽⁴⁶⁾?

プラトンは哲学者とそのポリス構築を、画家とその絵画制作になぞらえて説明しようとするのである。「神的な範型を用いる画家たち」(*οἱ τῷ θεῖῳ παραδείγματι χρώμενοι ζωγράφοι*)とあるが、これは文字どおり画家への言及ではなく、哲学者への言及であると理解すべきであろう。プラトンの考えでは、アイデアを真似ることができるのは哲学者だけであって、画家にはできないことである。IX巻の終わりの部分においても、「おそらく一つの範型が天に貯えられており」(*ἐν οὐρανῷ ἴσως παράδειγμα ἀνάκειται*)、哲学者はそれを観想しながら自分自身をそのポリスの市民に形成しようとするということが語られた(592B)。哲学者たちが自分自身の品性の中に、および哲人統治者候補の人たちの品性の中に理想国家を形成する教育課程は、以下のとおりである。

①「国家と人間たちの品性をいわば画布として受け取った後、まず第一に、その画布を浄めるであろう」(*λαβόντες, ……*, *ὥσπερ πίνακα πόλιν τε καὶ ἡθῆ ἀνθρώπων πρῶτον μὲν καθαρὰν ποιήσειαν ἄν*, 501A)

これは、プラトンはII・III巻で論じたムッシケー初等教育に言及していると思われる。そこでは、すぐれた素質をもつ子どもたちの魂が、将来の哲学学習の準備のために、整えられるべきことが語られた。音楽・文芸によるムッシケー初等教育は、哲学者の人間形成のためのムッシケー生涯学習プログラムの出発点であった。IV巻では、将来戦士あるいは国家守護者になる可能性をもつ子どもたちのためのムッシケー・ギュムナステイケー教育は、羊毛の生地を染め上げるにあたっての「下準備」(*προπαρασκευάζουσιν*, 429D7)にたとえられた。それは、彼らが、あたかも羊

毛の生地のように、染料ならぬ法律を受け入れ、それに美しく染まることができるためであった。そのような下準備の結果、法にかなった正しい考えが彼らに定着し、その彼らの品性の中に染まった考えは、快楽・苦痛・恐怖・欲望をもってしてもを洗い落とすことができない、ということが語られた(429D-430B)。その後、教育とは何か、あるいは無教育とは何かという議論の文脈の中で、太陽の比喩と洞窟の比喩が語られた後、VII巻においても、よい素質をもつ魂におけるいわば神的な器官である知性は、真実在への上昇の準備として、知性に付着する「生成界と同族であるいわば鉛の錘のようなものども」(*τὰς τῆς γενέσεως συγγενεῖς ὥσπερ μολυβδίδας*)、すなわち、食べ物への耽溺、またそれと同類のものとの与える快楽や貪欲などを「叩き落とされ続ける」(*κοπτόμενον*)必要があるということが、語られた(519A-B)。このような付着物の除去は、ムッシケー初等教育の大事な役割であった。プラトンはこの浄化の仕事について、「それはなかなか容易ではない」(*ὁ οὐ πάνυ ῥῶδιον*)という見解を述べる。抜本的な教育改革を考えているからだと思われる。彼はVII巻の終わりの部分において、現行のポリスを理想のポリスに再編成するにあたり、10歳以上の年齢の者たちを全員田舎に送り出すことを提案する。残った10歳以下の子どもたちを「彼らの親たちももっているような今のさまざまな風習から切り離し」(*ἐκτὸς τῶν νῦν ἡθῶν, ἅ καὶ οἱ γονεῖς ἔχουσι*)、彼の理想とするポリスの諸原理にしたがって養育するためである(541A)。子どもたちの教育者としては、「真の哲学者たちが、一人でも二人以上でも、ポリスにおける統治者となって」(*οἱ ὡς ἀληθῶς φιλόσοφοι δυνάσται, ἢ πλείους ἢ εἷς, ἐν πόλει γενόμενοι*)、新しい教育を行うのである⁽⁴⁸⁾。

②その次に、「彼らは国制の略図を写生するであろう」(*ὑπογράψασθαι ἄν τὸ σχῆμα*

τῆς πολιτείας, 501A)

これはプラトンがⅦ巻において提案した、中等教育としてのムシケー学習、すなわち数学的諸学科としてのムシケー学習に言及するものと思われる。そこでは、数学的諸学科は、真実在への上昇、すなわちまことの哲学を実現するために必要な「前奏曲」(προίμια)として位置づけられた。あくまでも「本曲」(τοῦ νόμου)は、ディアレクティケーであった(531 DE)。数学的諸学科はそれらだけでは真実在への上昇を達成することはできないが、目的達成のためにはどうしても通る必要がある「予備教育」(τῆς προπαιδείας)なのであった(536D)。

③その上で、いよいよ本格的な画の制作、すなわちムシケー高等教育としてのディアレクティケー学習に取り組むのである。

ἔπειτα οἶμαι ἀπεργαζόμενοι πικρὰ
 ἂν ἐκατέρωσ' ἀποβλέποιεν, πρὸς τε
 τὸ φύσει δίκαιον καὶ καλὸν καὶ
 σῶφρον καὶ πάντα τὰ τοιαῦτα, καὶ
 πρὸς ἐκεῖν' αὖ, ὃ ἐν τοῖς ἀνθρώποις
 ἐμποιοῖεν, συμμειγνύντες τε καὶ
 κεραυνύντες ἐκ τῶν ἐπιτηδευμάτων
 τὸ ἀνδρείκελον, ἀπ' ἐκείνου
 τεκμαιρόμενοι, ὃ δὴ καὶ Ὁμηρος
 ἐκάλεσεν ἐν τοῖς ἀνθρώποις
 ἐγγιγνόμενον θεοειδές τε καὶ
 θεοείκελον.

……………

καὶ τὸ μὲν ἂν οἶμαι ἐξαλείφοιεν, τὸ
 δὲ πάλιν ἐγγράφοιεν, ἕως ὅτι
 μάλιστα ἀνθρώπεια ἦθη εἰς ὅσον
 ἐνδέχεται θεοφιλή ποιήσειαν.

それから、思うに、彼らは色を塗っていくにあたり、ひんぱんに二つの方向に目を向けるであろう。すなわち、まず自然本来に存在する正や美や節度やそういったすべてのもの

に目を向け、それからまた、彼らが人間たちの中に作り出そうとしているその写しに目を向けるであろう⁽⁵⁰⁾。そして、さまざまな営みを混ぜ合わせて、肌色を、すなわち真の人間らしさをかもし出すであろう。まさにかのホメロスも、それが人間たちの中に生まれたときに「神のかたち」「神らしさ」と呼んだものに基づいて判断しながらね。

……………

そして、思うに、彼らはある部分を消し去り、またある部分を塗り込みながら、ついには人間の品性を可能なかぎり神に愛されるもの⁽⁵¹⁾にするように最善の努力をするであろう。

画家にたとえられた哲学者たちが、画布にたとえられた自分自身の品性と他の哲人統治者候補の品性の中に、すぐれた哲人統治者にふさわしい正や美や節度などのアレテーのアイデアを模範として、いよいよ本格的に画ならぬ国制を作り上げていく段階である。プラトンのムシケー生涯学習においては、ディアレクティケーとしてのムシケーを学習する段階である。「さまざまな営みを混ぜ合わせて」(συμμειγνύντες τε καὶ κεραυνύντες ἐκ τῶν ἐπιτηδευμάτων)とは、プラトンがⅦ巻において述べた哲人統治者養成の本格的プログラムに言及するものと思われる。ディアレクティケー学習に適すると判断された青年たちは、30歳から5年間、ディアレクティケー学習の訓練を受けるのであった。しかし、彼らは学習のみに没頭することは許されない。洞窟から解き放たれ、真実在の世界に上昇した哲学者たちが、そこに自分だけがとどまることを許されず、洞窟の中に縛られている人間たちを救うためにもう一度洞窟の中に降りていかなければならなかったのと同様に、哲人統治者候補の青年たちもディアレクティケー学習の訓練を受けた後、もう一度洞窟の中に降りていかなければならないのであった。そして、戦争に関する事柄の統率やその

他青年に適した役職を割り当てられ、実務を経験しなければならないのであった。その期間は15年間であった。これは、彼らが実際の業務の中で哲人統治者に適しているかどうかについて、試される時期であった。こうして、実務と知識の両面において、最も優秀であった者たちが哲人統治者のためのムウシケー生涯学習の最終段階へと選抜されるのであった。50歳からである。彼らは大部分の期間は哲学することにすぎ、善のアイデアを観照し、自分の順番が来たとき、善のアイデアを範として、ポリスとその市民たちと自分自身とを秩序づける仕事に従事するのであった。グラウコンは、ソクラテスが描いたこのような哲人統治者像を「まったく美しい」(παγκάλους, 540C)と賞賛した。この賞賛は、Ⅵ巻において描かれた国制の絵に対する、「この上なく美しい」(καλλίστη, 501C)と呼応する。また、Ⅶ巻における、その国民は幾何の学習を避けてはならないとされる「美しいポリス」(τῆ καλλιπόλει, 527C)にも呼応する。

哲学者は、「国家に関わることもを描くそのような画家」(τοιούτος ἐστι πολιτειῶν ζωγράφος, 501C)である。哲学者たちは、「神的な範型を用いる画家たち」(οἱ τῷ θεῷ παραδείγματι χρώμενοι ζωγράφοι, 500E)である。プラトンの考えでは、彼らが国の輪郭を描くのでないかぎり、国はけっして幸せになることはできないのである。国家を描くことに関するかぎり、真の画家は哲学者だけである。しかるに、現実とはいえば、詩人という名の画家が哲学者を押しつけ、真の画家の地位を横取りしていると、プラトンは見る。彼が、Ⅹ巻において画家を取り上げ、吟味するとき、その念頭にあるのは詩人としての画家である。彼は、「ある仕方では画家も寝椅子を作る」と言い、寝椅子に言及する。寝椅子がもつ文化・教養への関連から見ると、詩人もまた、「ある仕方では」(τρόπῳ γέ τι, 596E) 国家の中に文化・教養を作るとい

とであろう。ある仕方ではとは、「寝椅子と見えるもの」(φαινομένην, 596E)を作るということである。つまり、文化・教養と見えるものを作るということになろう。これに対して、「寝椅子製作者」(ὄκλινοποιός)は、寝椅子のエイドスは作ることができないが、少なくともある特定の寝椅子は作ることができる、とプラトンは言う。哲学者を考えているのだろうか。哲学者は、国家のエイドスは作ることができないが、それを模範として、見せかけではない実質ある文化・教養に満ちた国家を作ることができるのである。それは、「真実在にくらべれば、何かぼんやりした存在」(ἀμυδρόν τι τυγχάνει ὄν πρὸς ἀλήθειαν, 597A)ではあるが、現実存在するものであることには変わりがない。単なる見せかけとは違うのである。

Ⅹ巻の最初の部分におけるプラトンの目的は、ミメシスとは何かを明らかにすることであった。彼が、その目的のため例として取り上げたミメテースは、画家と寝椅子製作者であった。彼は、存在の度合いに応じて、三種類の寝椅子があると語る。すなわち、神が作った「本性界の中に存在する寝椅子」(ἡ ἐν τῇ φύσει οὐσα⁽⁵⁴⁾)、寝椅子製作者が作る寝椅子、そして画家が作る寝椅子である。神の作品としての寝椅子とは、天に範型として備えられている「美しいポリス」であり、寝椅子製作者の作品としての寝椅子は、それを範型として哲学者が作る現実の文化国家である。これに対して、画家の作品としての寝椅子は、詩人が詩の言葉で描く文化国家の幻影にすぎないということになろう。詩人は、作るのではなく描くだけである。しかも、描かれるのは、事物ではなく事物と見えるものにすぎない。しかも、哲学者はエイドスを範型として文化国家を作ることができるけれども、画家はエイドスを真似ることはできない。画家は、現実存在する国家を自分の目に見⁽⁵⁵⁾えるままに描くだけなのである。

したがって、ミメテースとは、本性（実在）から遠ざかること三番目の身分にあるものであり、ミメシスがもたらすものも、真実（実在）から遠ざかること三番目のものである、ということになる。もちろん、プラトンがミメテースとして一番念頭に置いているのは、「悲劇詩人」(ὁ τραγωδοποιός, 597E) である。ムウシケー生涯学習カリキュラムにおいて中高等レベルにある若者たちは、真実在へと魂を上昇させるのに役立つ学習に励むべきであることは、すでに見た。ミメシス詩人は、若者たちの学習を妨げ、彼らの魂を下降させるのである。

「2004年度 北星学園大学特別研究費による研究」

[注]

- (1) 585B.
- (2) Adam II, 385 は、595B10 の *ἀντὰ πάντα τὰ τοιαῦτα* を受けて「悲劇とあらゆる形式の *μιμητικὴ ποίησις*」を指すと考える。ただし、プラトンは「あらゆる形式の *μιμητικὴ ποίησις*」を拒絶するのではないことは、すでに見たとおりである。
- (3) 511D.
- (4) 533D.
- (5) 500C.
- (6) 500D.
- (7) エイロネイアではなく率直な気持の表明と解すべきであろう。
Cf. S. Halliwell, *Plato: Republic 10* (Aris & Phillips, 1993): 107-108.
- (8) 595C-596A. 傍線は筆者。
- (9) Cf. S. Halliwell, *Plato: Republic 10*: 108-109.
- (10) 596A.
- (11) 596B.
- (12) Cf. M. F. Burnyeat, 292-296.
- (13) Cf. VI巻 507 B-C. ここでも、美や善のアイデアが言及される。
- (14) Adam II, 387.
- (15) Cf. P. Murray, ed., *Plato On Poetry* (Cambridge University Press, 1996): 192-193. C. Griswold, “The Ideas and the Criticism of Poetry in Plato’s Republic”, Book 10, *Journal of the history of Philosophy* 19 (1981): 139 は、寝椅子のアイデアの指定は‘intentionally ironic’だと考える。すなわち、もちろん、そのようなアイデアは『国家』篇の他の箇所と矛盾するけれども、ソクラテスが詩人に対して皮肉を含んだ議論を展開するために、わざと導入したというわけである (145-146)。
- (16) Cf. M. F. Burnyeat, “Culture and Society in Plato’s Republic” (paper presented at the The Tanner Lectures On Human Values, Harvard University, 1997), 217-324. 以下の論述は、Burnyeat に負うところが大きい。
- (17) 372B-C.
- (18) 459E-460A.
- (19) 372D.
- (20) *Respublica*, 535E. *Laches*, 196D.
- (21) Cf. Burnyeat, 231: “It is *uncivilized*.”
- (22) 372D-E.
- (23) 寝椅子と食卓は、*τε*……*καί* で結ばれている。
- (24) Cf. P. Murray, ed., *Plato On Poetry*: 191-192
- (25) 373A.
- (26) 372E.
- (27) 373B-C.
- (28) 399E.
- (29) Cf. Burnyeat, 232-236.
- (30) Cf. *Amos* 6, 4-7.
- (31) Aristophanes, *Vespae*: 1208-1218. 高津春繁訳。
- (32) Plato, *Symposium*, 176E.
- (33) *Leges*, 639D-642A.
- (34) *Acharnenses*, 1085-1094.
- (35) 372A-373A.
- (36) Cf. Burnyeat, 232-235.
- (37) 以下は、David A. Campbell, ed., *Greek Lyric 5*, *The Loeb Classical Library* (Harvard University Press, 1993): 284-287 からの引用である。
- (38) Cf. Burnyeat, 236.
- (39) 592B.
- (40) LSJ: ‘colonize’. Cf. R. W. Sterling and W. C. Scott: ‘he will declare himself its citizen’.
- (41) Cf. Grube: ‘set up the government of his soul’. Bloom: ‘found a city within himself’.
- (42) 596B.
- (43) しかし、人工物のアイデアという考えは他にまったくないわけではない。Cf. *Cratylus*, 398A-B; *Timaeus*, 28A-B.

- (44) S. Halliwell, *Plato: Republic 10* (Aris & Phillips, 1993): 110. 'a carpenter has a mental conception of the features and qualities which he must incorporate into each instance of furniture that he makes.' Cf. P. Murray, ed., *Plato On Poetry* (Cambridge University Press, 1996): 193.
- (45) 500D.
- (46) 500E.
- (47) Cf. Eva. C. Keuls, *Plato and Greek Painting* (Leiden: E. J. Brill, 1978): 41-42.
- (48) Cf. Adam II, 41, 154-155.
- (49) 521C-531C.
- (50) Burnet は $\tau\delta$ と読むが, Adam に従って δ と読む。
- (51) Cf. Adam II, 79 は, $\tau\delta$ ἀνδρείκελον を 'the colour and likeness of true Manhood' と訳すのがよいと考える。
- (52) 501B.
- (53) 539D-540C.
- (54) ここでは η φύσις は, 事物の本性を意味するが, 厳密には, イデア界を意味すると思われる。Cf. Adam II, 390.
- (55) ALEXANDER NEHAMAS, "PLATO ON IMITATION AND POETRY IN REPUBLIC 10," in *PLATO ON BEAUTY, WISDOM, AND THE ARTS*, ed. JULIUS MORAVCSIK AND PHILIP TEMKO (ROWMAN & ALLANHELD, 1982), 58-64.

[Abstract]

Plato's Rejection of Mimetic Poetry in Republic 10 and
the Argument Concerning the Nature of Mimesis:
Mimesis and Eidos

Akira MIKAMI

Plato rejects mimetic poetry in *Republic 10* and explains the reason with three arguments: (1) the argument concerning the nature of mimesis, (2) the argument that mimetic poetry has influence over the inferior part of the soul, (3) the argument concerning the power of assimilation that mimetic poetry has. This article examines the first argument to clarify the philosophical intensions of Plato. To do this, first, the meaning of his unique view of Eidos is pursued; and, second, the meaning of philosopher as likened to painter.